

# 精神障害者が見た人々

Vol.10

広田和子 精神医療サバイバー&保健福祉「ンショーマー」

東京都テレビ制作 小倉 朗さん(42歳)

私はテレビ番組出演を断っていた。しかし小倉さんは「病院を案内してくださるんですか！ぜひ伺いたい」と言つた。そこで何日かお互

2001(平13)年3月。厚生労働省精神保

健福祉課のKさんより「…日本テレビでやつて  
いる政府公報『さわやか日本』という番組で國立精神・神經センターの竹島先生と対談してい  
ただきたい。収録日は22日の午後です」という  
電話を受けた。22日の午後は予定が入っていた  
ので「その日の夜でしたら…」と私は答えた。

Kさんは「それではテレビ局の方から連絡す  
るようにしますので…」と言つた。そして番組  
制作会社の小倉さんから電話が入り「広田さん  
にお会いしてお話を…」と言われた。「そうで  
すか。では私が医療ミスの注射をうたれて、そ  
の副作用のために緊急入院した精神科病院をみ  
てほしい…。その不幸な体験が私の発言や活動  
の原点ですので」と私は言つた。

その時の小倉さんの返事が「ノー」だったら

私の都合がいい日を選んで、病院の院長に電話  
を入れた。

院長は「前に広田さんがラジオ出演した時に  
ラジオ局の人があなたが来たけれど、あの時と同じ程度  
の説明でいいの？」と言つた。「ええ。あの時  
のように病棟を見てもらい、そして、今、○○

病院が抱えている精神科救急等の課題について  
いろいろお話ししてください。テレビ局の人には  
対する啓発にもなりますので」と私は言つた。

約束の日、小倉さんが六ツ川交番に来た時、  
小倉さんが六ツ川交番に来た時、  
「ここが電話でお話ししていた待ち合わせ場所  
なんですね」と言つたので、「そうなのよ。多  
くの相談者がここへ来て、私は本当にこの交番  
の歴代のお巡りさんにお世話をなっているの  
よ」と答えた。小倉さんは「いい話ですね」と  
言つた。そしてタクシーに乗つた。

○○病院の院長室で説明を聞いて、私が入院  
したA3病棟へ。小倉さんは一生懸命、院長に  
質問し、もう一度院長室へ戻つて、再び説明を  
聞かせた。そこで「ああ、広田さんに会つてよか  
った。本当に勉強になりました」と言つた。こ  
の言葉を聞いて「小倉さん！あなたの作る番  
組にでる気持ちになりました」と私は言つた。

小倉ディレクターは「そうですか。それでは  
早速ですが、テレビの画として、六ツ川交番と  
この家は、はずせません」と言われたので、私は  
は神奈川県警警察署の親しい課長に、小倉さん  
の言葉を伝えると折り返し電話が入つた。  
課長は「政府公報番組に六ツ川交番が映るこ  
とを署長が了解しました」と手短に言つた。小  
倉さんは、その日、5時間ぐらい一緒にいたが、  
しみじみと「実は最初にこの番組のことを厚労省  
に話した時、Kさんは『精神障害者の美術展』を  
推薦されたのですが、私は、何か言いたい人を  
紹介してくださいと依頼しました」と言つた。  
当時の厚労省精神保健福祉課には、広報番組に  
美術展を主張するKさんと、精神障害者のスボ  
ーツ大会を主張するNさんが同室内にいた。

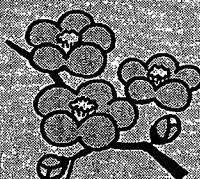
「きちんと言いたい人の代表で出るのであれ  
ば、いい編集にしてくださいね」と私が言つ  
と、小倉さんは「もちろんです。収録前にアナ  
ウンサーにも○○病院を見せたい」と答えた。  
わずか数分の私の番組出演の中で、私が活動  
をしている中で感じていて、多くの人々に話し  
ていた課題が盛り込まれたこの番組のビデオを

かつて私は主治医に“文章を書くのが好き”と語っていたところ、  
それが病状としてとらえられていた時代もあった。

インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり  
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。

現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないで、  
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。

長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが喜びだった。



ひろたかずこ